

指導資料



鹿児島県総合教育センター

国語 第104号

- 小, 中, 高等学校, 盲・聾・養護学校対象 -

平成17年10月発行

これからの時代に求められる国語力を身に付けるための 国語科学習指導の工夫 文化審議会答申を踏まえて

文部科学大臣の諮問を受け、文化審議会国語部会は、平成16年3月に「これからの時代に求められる国語力について」¹⁾を答申した。

同部会は、広く国民の国語力について審議するものであり、学校における国語科学習指導に、必ずしも直接の影響をもつものではない。しかしながら、答申は国語の意義・役割や望ましい国語力などを基に新たな提言を示しており、国語科教師にとって看過できない内容となっている。

そこで、国語科学習指導要領との関連から本答申を分析し、特に、読書活動の推進や情緒力育成の観点から、これからの時代に求められる国語科学習の在り方について述べる。

1 答申で示された「国語力」について

答申では、「国語力」を次の二領域に分けてとらえている。(下線は筆者加筆)

考える力、感じる力、想像する力、表す力から成る、言語を中心とした情報を処理・操作する領域
考える力や、表す力などを支え、その基盤となる「国語の知識」や「教養・価値観・感性等」の領域

を国語力の中核としながらも、をの諸能力の基盤となる知識等の領域に位置

付け、は相互に影響し合いながら生涯にわたって形成されるとしている。

なお、の力やの知識等の力と密接に関連しているものとして読書を挙げ、読書が国語力の向上で果たす役割の大きさを明示している。

また、「望ましい国語力の具体的な目安」を「『聞く力・話す力・読む力・書く力』の具体的な目標」として示すとともに、「これからの時代に求められる国語力を身に付けるための方策」を、学校や家庭、社会における「国語教育」と「読書活動」ごとに提示している。

2 国語力を身に付けるための「国語教育」について

「国語教育」とは、学校教育における「国語科教育」を内包した国語(言葉)にかかわる教育の全体、すなわち、学校、家庭、社会において行われる国語の教育全般を指す。このうち、最も重要な役割を担っているのが学校教育である。

(1) 「情緒力」とその育成について

藤原正彦氏は、²⁾論理的な思考力や語彙力を高めるためには、「読む」ことを重視し、

各領域ごとの比率配分を、「書く」が5、「話す」・「聞く」が各1であれば、「読む」は20であるべきと述べるとともに、自分で活字を追いながら読む行為によってのみ語彙力は身に付くとし、「読む」ことの重要性を力説している。また、「論理的思考力」育成にかかわる重要な領域として「書くこと」を挙げ、自分の意見を主張することで、論理的に説得力をもった文章を構成するスキルが育成されると述べている。

しかしながら、この「論理的思考力」を適切に運用するためには、やはりその人の高い感性や価値観といった「情緒力」が出発点になければならない。論理的思考力は優れているが、出発点自体が自己中心的で、自分だけに有利に事を運び論理を構成しているのではないかと訝いぶかられる事例も実社会では見られる。こうした事情に鑑み、本答申では「情緒力」を「論理的思考力」の前に打ち出したのである。

情緒力について、答申では「例えば、他人の痛みを自分の痛みとして感じる心、美的感性、もののあわれ、懐かしさ、家族愛、郷土愛、日本の文化・伝統・自然を愛する祖国愛、名誉や恥といった社会的・文化的な価値にかかわる感性・情緒を自らのものとして受け止め、理解できる力」ととらえ、これらは、「主に国語教育を通して体得されるものである」としている。また、情緒力の形成に欠くことのできないものとして読書を挙げ、「自ら本に手を伸ばす子供を育てる」国語教育の必要性を強調している。

(2) 「語彙力」とその育成について

感じる知性としての情緒力と考える知性

としての論理的思考力を共に伸ばすためには、「語彙力」の育成が必須である。

このことは、例えば、国語総合の〔言語事項〕の指導事項の文言と答申の文言とを比較するとより一層明らかとなる。

「『語彙』とは、ある言語体系の中で用いられる語のある種のまとまりのことである。例えば、生活語彙といえ、生活に使われる語の全体を意味する。『語彙を豊かにする』とは、正しく理解し使いこなせる言葉の数を増やすということである。語彙には、単語のほか、複合語や連語、慣用句が含まれる。理解の学習の中では、自分のそれまで知らなかった言葉に関心を持たせ、それを表現の学習において積極的に使うよう指導する必要がある。(言語事項指導事項)

人間の思考は言葉を用いる以上、その人間の所有する語彙の範囲を超えられるものではない。情緒力と論理的思考力を根底で支えるのが語彙力である。(文化審議会答申)

語彙力を身に付けることが情緒力等の形成につながるとの理念については O.F. ボルノー(1969)の「言語の習得は、ただ一つの表現手段又は了解手段の習得にすぎぬのではなく、言語による人間自身の形成なのである³⁾」を引くまでもなく、衆目の一致してきたところである。語彙力の向上を図る指導が、論理的思考力とともに情緒力の向上、ひいては人間形成にもつながるとの意識が、指導者側に必要である。

例えば、中学校第2学年教材「走れメロス」には、「笑い」の表現語彙が散見される。王の「憫笑^{びんしょう}」やメロスの「嘲笑^{ちやうしょう}」、セリヌティウスの「ほほ笑み」のどれもが、人情の機微を絶妙に表現している。こうし

た語彙に着目させる指導を行うと、登場人物の心情をより正確に把握することにつながる。また、「笑い」の語彙を様々な本から集めさせ、「感情語表現辞典（笑い編）」の作成を通して、表現活動の際に活用させることも、語彙力向上につながる。

学校の教育活動全体で語彙力の向上に取り組む例もある。小学校段階は、国語力の向上に特に重要な時期であるため、日常あらゆる場において語彙に出会う機会を設けることが大切である。例えば、階段の段差面に既習語彙を月毎に掲示したり、廊下や階段の踊り場などに「今月の名文」を掲示したりして児童が日常的に名文等に触れるよう工夫した取組や、読み聞かせの場を多く設け、美しい言葉のシャワーを児童に浴びせている取組などがみられるようになった。

こうした指導とともに、児童生徒の発達段階に応じて明らかにしておくべきものに、到達点がある。

「妖艶」の語を例にとると、文字を認識して「ようえん」と読める段階までを求めるのか、「なまめかしく、あでやかな美しさ」の意であると理解できる段階までを求めるのか、それとも、様々な実態から妖艶を区別・判断できる段階までを求めるのか、さらには、自分が内包又は欠如する妖艶の概念を認識するといった、自己認識の段階までを求めるのかということである。

児童生徒がこの自己認識段階に到達したときに、感じる知性である情緒力も共に育成されると言っても過言ではない。

(3) 「読書活動」とその推進について

ア 読書の楽しさとともに障壁の設定を

読書活動を推進していくためには、家庭・地域との連携を一層図っていく必要がある。（『指導資料』通巻1426号参照）

答申では、学校教育において読書習慣を身に付けさせる重要性を確認するとともに、読書の楽しさを味わわせる一方で、様々な障壁を設定し、苦しい時期を乗り越えさせる配慮も必要であるとしている。

以前、新聞の「声」欄に、これまで全く本を手にする事がなかった中学3年の男子生徒が、学校の『朝読書』のために仕方なく本を購入したところ、一読して引き込まれて2時間程で読破してしまい、次は更に長編や難解な本に挑戦したくなったと投稿していた。この生徒は最後に、「本を読むということは、日本人にとって大切なことだと思いました。」と結び、⁴⁾素敵な本と出会えた喜びを吐露していた。素敵な本との出会いが日常的に不足している中・高校生にとり、「朝読書」の場は、乗り越えるべき障壁の役割を果たしていると言える。

イ 障壁とともに自主性の育成を

中・高校生の読書活動を推進していくためには、こうした障壁の設定とともに読書に対する自主性を育成することが大切である。そのためには、専門的な書物を読む前段階として、各種の入門書を読むことから始めたい。具体的には、一般向けの本や古典を読む前段階に当たる入門書などを選定し、「中（高等）学校入門 冊」等の命名でブックリストを

作成したり，子どもが興味・関心をもった本を「教科通信」や「図書館便り」などで紹介したりすることなどが考えられる。

本の選定に当たっては，幼児から小学校低・中・高学年，中学校までの良書や貸出回数が多かった本などを紹介した，鹿児島県立図書館の「こどもの本 - 児童図書モデルリスト - 」が参考



図1 図書館での活動

になる。
文化審議会でも，「子どもたちに読んでもらいたい本のリストを作って広く示

すべきではないか」との意見が齋藤委員と小林委員から出され⁵⁾，リストが作成された。小林委員の高校生対象分を次に挙げる。

表 子どもたちに読んでもらいたい本リスト

小林一仁 委員作成 - 高校生対象 -

小 説	作 品 名
森 ？ 外	「舞姫」
夏目漱石	「三四郎」
志賀直哉	「城の崎にて」
芥川龍之介	「奉教人の死」
宮澤賢治	「セロ弾きのゴーシュ」
川端康成	「伊豆の踊子」
石川達三	「生きてゐる兵隊」
大岡昇平	「野火」
井伏鱒二	「黒い雨」
井上 靖	「天平の甞」
大江健三郎	「死者の奢り」
安部公房	「砂の女」
北 杜夫	「榆家の人々」
遠藤周作	「深い河」
詩 歌	作 品 名
萩原朔太郎詩集	『月に吠える』など
高村光太郎詩集	『智恵子抄』など
中原中也詩集	『在りし日の歌』など
正岡子規	『病牀六尺』
石川啄木歌集	『一握の砂』など
会津八一歌集	『自註鹿鳴集』
塚本邦雄	『茂吉』『赤光』『百首』
山本健吉	『現代俳句(上下)』
大岡 信	『折々のうた』シリーズ
随筆・評論ほか	作 品 名
福沢諭吉	『福翁自伝』
夏目漱石	『私の個人主義』
鈴木範久	『内村鑑三』
三木 清	『人生論ノート』

寺田黄彦	『寺田黄彦随筆集』
中谷宇吉郎	『雪』
柳田國男	随筆「雪国の春」など
柳 宗悦	『手仕事の日本』
宮本常一	『忘れられた日本人』
和辻哲郎	『古寺巡礼』
谷崎潤一郎	『陰翳礼賛』
堀 辰雄	「浄瑠璃寺の春」
東山魁夷	「風景」(『日本の美を求めて』)
日本文学研究会	『きけわだつみのこえ』
司馬遼太郎	『十六の話』
波多野誼余夫・稲垣佳世子	『知的好奇心』
岡本夏木	『ことばと発達』
大野 晋	『日本語練習帳』
丸山真男	『日本の思想』
古典への誘い	作 品 名
北山茂夫	『万葉の世紀』
秋山 虔	『源氏物語』
石母田正	『平家物語』
堀田善衛	『方丈記私記』
小林秀雄	『無常といふこと』
尾形 仂	『芭蕉の世界』

ウ 障壁とともに達成感を味わわせる活動を一方，苦しい期間を乗り越えさせるためには，高度な内容の本であっても読むことができたという達成感を味わわせるとともに，教師が適切な評価をすることも大切である。具体的には，各教科・領域等において学習した内容にかかわる本で，一般書に類する本を紹介することで，「ちょっと難しい本だがわたしでも読める」といった自信をもたせたり，教師の中・高校生時代の読書体験を話すことで，「先生の読んでいた本を手にとってみよう」といった意欲を喚起したりする指導が肝要である。

また，地域との連携において，読み聞かせ等のボランティアを受け一方で，児童生徒に地域貢献にかかわる体験をさせることも大切である⁷⁾。児童生徒がボランティアの受手と為手の両者を体験することは，自己有用感を喚起することにもつながり，活動に対する真剣味が高まるものと思われる。

こうしたソフト面の充実とともに、学校図書館そのものにかかわるハード面の環境整備も重要である。子どもが自ら本に手を伸ばすためには、入りやすく明るい雰囲気であるとともに、読みたい本がすぐに見付かる陳列の工夫等が欠かせない。そのためには、学校図書館に子どもの作品等を掲示したり、子どもが学習している内容に関する情報を展示したりすることが有効である。

また、学校によっては、入館者数倍増計画等の数値目標を掲げ、児童生徒の手づくりによる環境整備に全校を挙げて取り組んでいるところもある。ソフト面の充実とともに、ハード面の充実を図ることで、「自ら本に手を伸ばす子供」を育てていきたい。

3 これからの国語科学習指導について

答申では、国語科ではぐくむ「国語科教育」についても言及している。国語科における国語力は、学校全体で育成する国語教育における国語力に含まれるが、情緒力と論理的思考力の育成についても同様に内包される。特に、答申では「情緒力」、「論理的な思考力」、「思考そのものを支えていく語彙力」の育成を重視することを求めている。以下に、教材等を基に具体的な指導の在り方を示す。

(1) 情緒力の育成に着眼した国語科学習指導

小学校第2学年教材「ともさんはどこかな」は、聞き手が分かりやすいよう大事な特徴を落とさずに選んだり、順序を考えて話したりすることができることを目標に、

これまでも様々な指導が工夫されてきた。

こうした指導に加え、本答申の視点である、自己の迷子体験や迷子を捜す立場の心情を^{おもんばか}慮るといった情緒力の育成をねらいとした学習を取り入れることは、人の痛みをより一層実感することのできる児童の育成につながる。また、自己の変容をモニタリングするとともに、実生活とのつながりを意識付けるために、アナウンスの内容をカメラを通してテレビ放映することも有効である。

(2) スモールステップで達成感を味わわせる国語科学習指導

小学校第6学年教材「短歌・俳句の世界」は、日本の伝統文化に対する裾野^{すその}を広げるとともに、伝統文化を日常に取り入れ、鑑賞文を互いに交流し合うといった言語活動とのかわりをもたせる指導が行われてきた。

こうした指導に当たっては、「スモールステップ」で評価の観点(ルール)を細分化し、その観点を教師はもとより児童にも相互に共有させ、自己評価や相互評価活動につなぐことが大切である。また、あらかじめ短歌・俳句ならではの語彙を提示し、理解語彙を使用語彙に高めさせる指導も有効である。

こうした自己評価力や語彙力を向上させることは、自分自身を自分で深化・修正するといったメタ認知の視点や論理的思考力をはぐくむことにつながる。

(3) 新聞等を生かした国語科学習指導の視点

去る7月28日、29日、鹿児島市で開催された「第10回NIE(エヌアイイー)全国

大会」では、新聞の記事を生かした国語科学習指導の在り方が具体的に示された。

県立松陽高校 福重成美教諭（国語）の「新聞記事を参考に人物紹介文を書く」をテーマにした実践では、人物紹介やインタビュー記事の内容や構成、記述方法などを基に、生徒の表現力の向上を目指した指導の在り方が提案された。人物紹介に着目させるメリットとして、生徒の書きたい気持ちを高揚させやすいことや、読んでもらいたい内容を表現しやすいことが示され、まさに「情緒力」に配慮した実践となった。

こうしたNIEの取組は国語科を越えて行われており、学校を挙げて取り組む国語教育ともつながるものである。

4 自己充実感を味わわせる指導について

ここまで、国語力の向上に当たって様々な方策や具体的な実践事例を挙げながら、その意義について述べてきた。しかしながら、読書を含めた様々な活動は、必ずしも十分な意義付けができない（又は困難な）場合がある。答申の「苦しい時期を乗り越えさせる配慮の必要性」の文言も、まずは苦しい活動を経て、しかる後に喜びや充実感、そして活動の意義を認識することもあるとの考え方を示唆したと言える。

小説家の阿刀田高⁸⁾氏は「日本人は生真面目だから、なにをやるにも“ためになる”“役に立つ”などなど大義名分を求めたがる。ただ、“楽しいから”だけでは気が引ける。（中略）読書もただ“楽しいから”それだけでもよいではないか。（中略）難があるとすれば、テレビやケータイとちがっ

て、とっつきにくい。入口のところで少し努力をしなければいけない。ここを通り抜け読書習慣を身に付けてしまえば、もうしめたもの。いくらでも楽しい道が続いている。」と述べている。

学校図書館や教室、廊下といった様々な場所に配置してある本に、ちょっと頑張っ て手を伸ばしたら、これまで経験したことのない世界が広がる楽しみを味わえるところに読書の出発点はある。「読む力」の育成においては、自分自身で語句を読み解くといった忍耐力を伴う活動を経て目標を達成することが、自己充実感や自己有用感の喜びにつながる。

教師は、児童生徒が乗り越えるべき障壁を子どもの実態に合わせて設定してやるとともに、その障壁を、成長過程に合わせて少しずつ上げていくことが大切である。こうした視点から個に応じた指導を再考すると、段階的な個人内評価の規準設定、つまり、「Slow and steady wins the race.」の精神を踏まえたものであるとも言えよう。

【引用・参考文献】

- 1) 文化庁ホームページ <http://www.bunka.go.jp/>
- 2) 藤原正彦（お茶の水女子大学教授）審議会委員
- 3) ヴット・フリドリッヒ・ボルノー著『言語と教育』
森田孝 訳 川島書店（1969年刊）
- 4) 「本を読んで」『南日本新聞』（7/4付）から
- 5) 齋藤 孝（明治大学助教授）審議会委員
- 6) 小林一仁（桜美林大学教授）審議会委員
- 7) 地域の方々に読み聞かせを受け一方、児童が
独居老人宅を訪問するといった活動事例もある。
- 8) 阿刀田高（小説家）国語分科会副分科会長
（教科教育研修課）